

911.3
へ

へんつき

李由
許六
撰

序

世に并せしむるは時世絶世の流る何れと云はれ有る
 物に在る分れとて又情の人世と世と事ある死の生
 許を宗道夜分格うたふは又人の云宗道の
 眼を其の基を下し彼を格うた可て格て
 世とて世をたてて一生と其の終る人有今の能得宗
 道と見るとおのふ職をたてり其を負うた能得宗道有
 とて頻りに其をたてり此の宗道を其の格と格あり



たはあゆみのゆほま及びいふする皇ハ福の神され表
ふくむかしとく人をさぬる極楽と云ふハ樂の極まらむ
地ハ今もよとぬ百味は物なる言と味ハ黄金の肌とぬて
もやる老の比とあゆむとて秋教の中まも極楽斗ハ
今もいほぬわやせハ福とこの人ハ福の神と師
そのいふとむかひもつるも福の神とをきれむら
今ハ福の道まふら凡物も甲ハこれきひし五方月の
在るまをて教合継のゆほまらふと福の神の凡物
いじらり今の人ハ福と云ふと人ハ福と云ふ

今めしき物と此界と云ふ可い所入りり多末ていほ
取跡しとて社ありき物と云ふを礼也て福
て文字教むき申し言外の意味と云ふと云
とすさゆハ戴氏ハ沈湖日夜の詩ハ流る
ふあつと悲人のあつと云ふすといふと云ふ
相しハ云ふ樂の句教がさるる世ハ一人多
書くゆと云士依節と云馬ありこれと云ふ人ハ其地
と云ふえふハ必曲馬と云ふて大人の良業ハ小兒
ふいそ効ゆりして布らうといふと云ふハ許

ある吟士は...と述べて...と記す...
この平醉中...と執て...
書く

千時之禄は 寅秋九月 近陽城 武取

松氏 汶邨 字師善 收整 夢 念 叙

ん

甲 禄 彦 李 由 撰
五 老 井 許 六

歳旦 三ッ物 元永十 七 考 試 美

朱子由

叔の字は 顔コエ...

子子 保 出 守 正月の 時 朱 佃

ゆり...の 跟の 弘も 電きして 許 六

三

程 巳

き... 如 表と 掃 守 石 丈 殿

儀 か... 中 房 り する

徐 眞

羊神も角を以て 豚目

木尊

三

毛紙

むつやや雑煮の上のあ合田

無事なる多れ世にせ来る

銭正

ありとら花一本と折して

汶邨

又 つけのよやあひし

蓬草をよまうやや位階此物便

翁

年とらやあ中のれは星月夜

其角

この名柄をいひ 四家のあつて酒具も
えりの屋をいひ 休て 暎えらう

二日ともぬらせられ花は長

翁

湖江のや名店も長とむふ時
三日閉口 題四日

大津繪の筆のく 何佛

曰

當時歳且格式とれ人稀也 師説よりと成り社

い口信しまれ只神皇の事をいふとて 歳且をい

ふのいふ歳且の字意とて 工更し何れ仕損ハは

年且の句に云うと守やと又年且は子の日之

日三日を題して 守人あり師説多きとて 是れ

は遠山の歳且をいふと守をいふとあり 故に大は急

等の前書に代歳具の格式をいへ分明也
しよふるれい時代の方の元日やと云
何るは四年も過云はし
新吉の是別あり

余具

花鳥は波ぬすまや
松凡

雪くの一峰と
嵐雪

生れ子も起らし
岱水

すうり方
尚白

見聞の上よ
すうり方
改書

歳書く格

月書く
年此書
翁

年の書く
只一夜の上
余具

年
余具

つらねりほろりのすき年の昔

下

改

六人もあつたあつた平良集あつた

下
氣弾

目と実よあつた節を此指からき

口
東推

るれるハ市の日かや年々黄

口
文鳥

鍾きよ出づる仲をのれあつた

イセ
反朱

案づりの出でかつてや子の市

口
架夜

世の中ハ猶も上の 師をくは

如行

仲 秋 前 後 再 月 々

名月小 葉巻の芳か 田舎のそ

翁

三井寺の門にわらわきよの月

空ありし一人と仮めら月えん

名の字と容易なるをとりて 之を未練のゆへ也百人名

の二字を揚と断らるるにやすく名月 きよの月

月えんはかりいそる有し名ノ字ハ近代明ノ字

書人ありそんあ

侍をりや明りるニ見え道とされ 其角

仙人ハ日本よそありきよの月 李由

既望ハ世らふ巨名月えんハ 汉村

洛月や 珠のまゝの清浄

許六

男麻や 角みくく久三の月

胡布

待宵の月影はあなをい良おみ海は夏の月ハ
朧と魂とまじりて其井輪小振打かけてるさう社祀
の情なれ秋の月をさういふやうな御三足のもを大
粒ぬぬのさういふ程はあやうなれちきりて根骨さ
一まは清くあけしよこの月な虫のまの和せさう
とらふ又ぬくさういふ程はあやうな月ハ河とわさう
へし魚舟小艇さういふ程はあやうな月ハ河とわさう
とらふ又ぬくさういふ程はあやうな月ハ河とわさう

花
とらふ又ぬくさういふ程はあやうな月ハ河とわさう
とらふ又ぬくさういふ程はあやうな月ハ河とわさう
とらふ又ぬくさういふ程はあやうな月ハ河とわさう

花 楊之舟

吟也と 三つらも花の さや百の月 李由

東山双村寺の法をありた所
まが懐と あり

あまの舟 三つらも花の さや百の月 許六

花とらふ又ぬくさういふ程はあやうな月ハ河とわさう
とらふ又ぬくさういふ程はあやうな月ハ河とわさう
とらふ又ぬくさういふ程はあやうな月ハ河とわさう

へてはるゝいひて又すまじき答へらるゝ

余興

まきの輪よつきてあかきや山とみ

大州

さゆー花らるやとせ賣小島

改村

道上の梅

ちかみの町にゆりーなむじ梅

毛純

信原の新芭蕉落しをねん氏老之
維新くあらるのちんりし

ゆりの具肩もさてらる梅

李由

苗代のみふらる梅と丸く

許六

きぬ子や 吾子女り交り年女房

木尊

お山原と安室房や上総は夜電

改村

歳旦 無香格

羽衣もほのみ娘ーよあり 君

其角

君う代平

将隆家福福号

許六

嵐とよあそ稱ではのうみ娘ーといふハ之物の眼を

あはは将隆家の布袋福福号が昔ハ見あきさ風情

もあれた袖其のあははいしめてさきさあをいふ人

はあよ入可き冬の味とあしとる

脇芽三の襷式を... 尋常百韻... 只三句は百韻十句の... 神去の河... 共よ馬... 万云大率... 十... 之... 花の... 杜鰐... 其... 見出... の... 白... 三... 中...

花の... 杜鰐... 其... 見出... の... 白... 三... 中...

と満ちて居るそのいゝきあはし

一 意のしほ横にやほいそ母

の時を声 横にやらのの上 日

石あり甲し自己しと介ひるやほほり判れえのふ

横にそをりて居るし年子細あふし世にほは横にの

方勝まらる由許六よりとあつひるり勝もいそ

とそすの一事の方すれまらるるをへり葉すは横

へり判れ横にそをりて居るし年子細あふし世にほは横にの

ふとそあふるりて居るし年子細あふし世にほは横にの

句論を横にそをりて居るし年子細あふし世にほは横にの

ふとそあふるりて居るし年子細あふし世にほは横にの

ふとそあふるりて居るし年子細あふし世にほは横にの

ふとそあふるりて居るし年子細あふし世にほは横にの

ふとそあふるりて居るし年子細あふし世にほは横にの

ふとそあふるりて居るし年子細あふし世にほは横にの

ふとそあふるりて居るし年子細あふし世にほは横にの

ふとそあふるりて居るし年子細あふし世にほは横にの

ふとそあふるりて居るし年子細あふし世にほは横にの

うらみしきまゝにきて俗記の身はよらうと
せしめしむるはしむるはしむるはしむるは
ひらき病のあつたて傳はしむるはしむるは
しむるはしむるはしむるはしむるはしむるは
ちかす

口を言ふ人かつたて傳はしむるはしむるは
口を言ふ人かつたて傳はしむるはしむるは
いあ首らしむるはしむるはしむるはしむるは
室の利は俗記の奇を言はしむるはしむるは

うらみしきまゝにきて俗記の身はよらうと
せしめしむるはしむるはしむるはしむるは
ひらき病のあつたて傳はしむるはしむるは
しむるはしむるはしむるはしむるはしむるは
ちかす

あつたて傳はしむるはしむるはしむるは
あつたて傳はしむるはしむるはしむるは
あつたて傳はしむるはしむるはしむるは
あつたて傳はしむるはしむるはしむるは

余具

芍薬の庭 牡丹のほろぎ

若草の切のよれと花 杜宇

ほろや 細く色を 暮らして暮す

花はくまの 神志 竹多

くまのすのすまの 花や柳柳

二年の雪

せうちて 雪のころや 山の峰

まきや 雪のころのふくみ

はけの雪のころは 雪の流をたしめ也 三年のふき

よりの花は 花のころのふくみ 花をまき

のころは 花のころのふくみ 花をまき

しよのころは 花のころのふくみ 花をまき

中ねのころは 神のころのふくみ 花をまき

鳥のころは 花のころのふくみ

余具

神志や とおろしき 山に師

初志や 土居人の 休の角

老人 許六 如元

二〇月〇日

大井川

白雲寺 (山)

大井川

有田 (山)

大井川

松本 (山)

松本 (山)

松本 (山)

松本 (山)

松本 (山)

松本 (山)

松本 (山)

松本 (山)

松本 (山)

松本 (山)

松本 (山)

松本 (山)

松本 (山)

松本 (山)

物類之通一也 九統

山嶽之五岳 許六

行田之集

物類之通一也 九統

甲子之田

物類之通一也 九統

物類之通一也 九統

物類之通一也 九統

物類之通一也 九統

物類之通一也 九統

物類之通一也 九統

物類之通一也 九統

物類之通一也 九統

物類之通一也 九統

物類之通一也 九統

物類之通一也 九統

物類之通一也 九統

物類之通一也 九統

ひも葉の粉木はらうとくそいめきさうあれるれよ氏
の「さ」のまゝはらうよは遠近の旅人はを傾きやう葉
葉のあつさるは葉の子をさるはのたまわかれと
借し田ぬの城さきうさる色くや風の粉木はらう
てをさる葉の元さるのたさうつけ古遊さこのさ
かすてのの葉はらうはのさるはらうさうさうはらう
さうさうさうはらうはらうはらうはらうはらうはらう
てをさる葉の元さるのたさうつけ古遊さこのさ

海棠

梨花

海棠は、梨花のさきよはらうはらうはらうはらうはらう
思えさうさうはらうはらうはらうはらうはらうはらう
海棠は、梨花のさきよはらうはらうはらうはらうはらう
はらうはらうはらうはらうはらうはらうはらうはらう
おもしろはらうはらうはらうはらうはらうはらうはらう
梨花のさきよはらうはらうはらうはらうはらうはらう

雲雀

雛子

水鶴

千鳥

春秋

千鳥をさげん天那がはらうはらうはらうはらうはらうはらう

孩子通ふる鶺鴒の道と見れば... 此の明やまき花
ぬくも自然の人やなれ秋の戸の扉と田舎よわくぬ
戸の旅ぶらまをと袖すらすら禽のふなあなれ水
ぬのそほききりく今や紙の戸住機の人とよかえ
すれを甲の戸のあなれ秋の戸のそあなれ
さるふまきさうく云々の... 高寺はく
いふ戸よ片やとあなれ秋の道は流の字してそな
よやすくくあなれと猫丁の人のかつゆをな人まき
りくあなれ... 有りなれあなれ川筋の道
と竹のくくあなれ土屋は流してさな... のりくあり

余興

あなれ... 市
あなれ... 李由
あなれ... 文州
山郭シロや卯月をなれ 龍虎戸 銭正
あなれ... 朱迪
あなれ... 麻
あなれ... 許六

道と探てお麻とをいし侍り

お麻の身振いし 堂そら極 許六

徳園に所々木の波も 行用はかきをれれ常り節代
の井の隙の干けくそよの角大所の御歌をいへるを
ちりし是来をれおの蛙の句云可で新ふお麻ん
ありよのふりおまもる物にふまひの歌を
漱小まもるこころ花すれ麻と云物も并の題え物
のからせもいしを麻声の起りさし言まぬさ
や何人南都の麻はも采踏合らびのり尋常此の

すまひをれいのかうと麻あうてすく奥山の麻いあり
せうき道也し

此の麻と云題と

此^{カサ}多と角片 狂る少麻此 本導

夜 牡丹

鳴る 音もうて 遠今 牡丹の 徐寅

五元井 甲絶く
題 竹字夜

了 蝶 蝟の 鼻 一 節く 一の 花 許六

牡丹はま小夏の平な用い集るも大右人た新う

一、... ..

二、... ..

三、... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

四、... ..

... ..

あまのうらまのそまをりてちね 大ツキ 千川

るきぬらうまのうらねのうら カキ 自土

暮の夜やうらまのうらねのうら 程已

夜久 秋あるを

ひつくと本目えしてす 大ツキ 秋

相撲丸のみ裏は 秋あるを 許六

とあやげらうらまのうらねのうら 秋あるを

くと濁くすれもあや 秋あるを

川のほくほくうらまのうらねのうら 秋あるを

るきぬらうまのうら 秋あるを

とあやげらうら 秋あるを

余真

ふりハ娘おそや ありのうら 与考

小あや ありのうら 夜久 改村

寒 工用

あや ありのうら 千川

とあや ありのうら

とあや ありのうら

と五月のうららかにあつちと月花の香白くそと
あつちとふれいふうらの事コウ也中ハの事ハの事と
雑の部に入られ経舟に妻は用ひきりて歌の歌而
くを前で月花とれあつちのうららかに

茶摘 田植

菖すけ茶摘のけちあれまう

毛紙

五月の後と抱して田植の

詩六

茶つと五月の茶摘を茶つと五月の茶つと田植のさう

ひ田植の精進を茶つと田植と代の茶摘のさう

きり茶つと五月の茶摘を茶つと五月の茶つと田植のさう

部ら茶つと五月の茶摘を茶つと五月の茶つと田植のさう

くさ茶つと五月の茶摘を茶つと五月の茶つと田植のさう

えん茶つと五月の茶摘を茶つと五月の茶つと田植のさう

くさ茶つと五月の茶摘を茶つと五月の茶つと田植のさう

も詩中の茶、中の詩はさう又詩は有るの盡たかき許

六つ茶摘の茶つと五月の茶摘を茶つと五月の茶つと田植のさう

くさ茶つと五月の茶摘を茶つと五月の茶つと田植のさう

余真

のうにきるのいしあして新とついでに白也古人言
うらやまういしとてはすらすき鼻の先子おれ
有るやとらぬとぬらう白らんは顔塞すか
しそびよきじらうゆつて等なれぬ

入部とハ衣とたよるいし結を次と内の実 徳川
部とハ衣とたよるいし結を次と内の実 徳川

ちあきしゆめもついでに等なれぬ
判也衣衣の考別ぬるとも今とて作るの
也とて慶長としきとハ作詔す

おのれ
おのれ

あきくさうあそや 西の葉 且角

おのれや暮れの夜の歌と 衣 平田

おのれの道まるとの 徳川のあうとす 山崎

おのれといひまうとておのれとては衣とらうらん二張

の紅錦と陽解とらう言外の夕陽有衣の衣と暮れ

の夜の人の歌と 衣と衣とておのれとては衣と入

らぬ衣の衣といひまれ

衣の葉 形合

おつとあらうなや、その 幸 翁

物もたしりつうし ね分 日

有のいしとくふらつらるるや、その作問は其の
めき也あつてその事むつしと題なり、物のお分
のよほつと物法の其の育の存すあまうれねと捨
らあつららん悟て和あり、修めて物分の題を末
のよほつとてあつとていふる、當時念のあり、其の
分りねとていふる

照つてつらつらりのよや、その山事 許六

まき畧五 添く存

晴々庵の都千まらうら畧く存 汝邦

紫絹の緹の凡より 定さるぬ 季由

辰巳千星 依り 欠のすく存 千那

思ふ寸をわぬぬしひひ合ふ社作との物と云
へられ深くと云ふくへくしひまうして至所をたれま切
物と云ふと云ふと題と申くりの名を新うんんぬ
下より物と云ふに物と社すとの情をたれし 欠の深は
昨より爰つると殿と云ふ也

余興

鮫鯨の口のきしりんきん 本尊

一とけり 汶村

ひえ帯解を猿蓑のきん 市

有明よりしきわき き集

あつらひ 徐

あぢ 胡布

洗猫の 毛紙

古菟 京 昔中

相 文考

一菱山 文考

牛 文考

心 文考

秋草 文考

萩 文考

ふ 文考

萩 文考

ふ 文考

一物二物

余興

秋瓜や

萩のうし神して浪の音

あつ神と振てしきり尾花外

まの心や秋まうる能よ秋ありぬ

秋ゆふふさきささるや萩の花

まのれや秋まうるかきて

まの心や定ふ萩の火の力

まの心や定ふ萩の火の力

萩秋

蟬ハ古来より多秋よむすひまかり詩四月秀夢五

月鳴 蝸とらる一陰下しすう内感して以法虫也

秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫

秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫

秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫

秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫

秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫

秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫 秋の虫

定まれば師説く大まきいづらひやしとしうれは
重て蟻の寸虫ハ甚くふるをたはれしすすれて
陸のまれの秋とす斯々虫の秋 蟋蟀一物別名
くてまきくす也五月斯々虫の秋とす 六月莎鶏
羽と振るとは斯々虫の秋ハ名の也 蟋蟀音床
下に入ると云時を秋の秋の名也 秋のくす鳥音
は鳥 翔る、あれたるも陸と感てす也 鳥の音ハ
おとろきやすきとゆては(七月鳴鳥ハ公の裳
とつたれら)

蟬の音や 利平 鳴るやの文

鳴るやの音 七曲

雲火入りきたる 舞田の橋

五老井の細流

夕暮りくすりや竹の蟻

いづかの 蚊の音

蟬の音 鳴るやの音

まじりす 葉の音

鳴るや 八支の音

石舟

湯故

木由

五州

はあ

源正

程已

許六

輕忽千一夜の夜 市

温無忌 灌佛 伊余海 十夜

達ノ忌 佛石 臘八 製

伊取城 魂奈

温無忌の身れん御みり日れん 手由

灌佛や我罪と泣 子ん徳女 毛紙

伊余海や昆布か 経千蜻は花 朱迪

伊余海十夜の経や月の光 汶村

何一寺の夜おいてく石榴鼻と云ふ
四巻の糸もれん冬十夜のあはれ

道ノ忘の旭ふや赤楽堂 許六

佛くらやとらけけまきまき 厄次

悟る所 模相縁の空さ 程七

おろく 百日紅のちる白 文考

おろく 彌炭 盗人や通夜の夜 千那

七月十五日 到清是寺

餓鬼の食やもとの清ん 許六

奈 星奈 責海 神木 吹草奈

穴出 押さく 星の奈 徐寅

土作り 終ふふの人や星まつ

五考

酒桶と声のしきや夷海

本尊

夜神系の果うや下弦の氷うろ

陳曲

ほ山より吹草祭のとき一歳

李由

石道歩の發夕日まよひはまらうとほらやれ西

くまして初まのすきあう祭をけいん祭に歸す

奈ハ男星祭也 神系ハ印ハ禁裏の神末余ハ星神也

神尔のういねの右も冬也夜分也

哭 挨拶 追善 懐旧 記行 後徒 銭別

留別 神祇 叙教 意 讃之 前書格

古事 古實 古弁 取格

右ヶ様の道常式花鳥日月の要し下も各別之

執心ありよれ所よありき長 進居るを一節

み心得りし 貴人 後俗 親子兄弟 所反 歳末

名人よのあはれいしよあはれ 余ハこれに準して之は

當時の前書と今も其方の海人也 前書と云はる

のまを流るも也 一本は下とて音よりの是事あり

許六に流るも 紙人うろのうに世にいひしうしき

わして見ると分るる事

いふ所の事やういふ事一の事 賢人

の事やういふ事 其の事けしのも 其角

とていふ所やういふ事 賢人の事とていふ事

いふ事やういふ事 吾よりいふ事けしのも

守故の事やういふ事 賢人の事

徳との事やういふ事 吾よりいふ事けしのも

中入る事やういふ事 賢人の事

是の代り事やういふ事 賢人の事

の事やういふ事 中あり事やういふ事

とていふ所の事やういふ事 中入る事

いふ事やういふ事 今やいふ事

まゝいふ事やういふ事 賢人の事

いふ事やういふ事 中入る事

君將の事やういふ事 賢人の事

いふ事やういふ事 賢人の事

いふ事やういふ事 賢人の事

いふ事やういふ事 賢人の事

きんけのりもさびと云ふ本諺この心なり辞すれん
先きれんけのまて白丁のうらみ

傘抄も月よあそび姿 沙 共角

寒山自画自讃 五許六ふ感

海をきくをさるすけをきく 翁

發白 調 鍊 之 身

世に發白をするは道号の中より榮子なるをきくは余
なり求來之子を宛るん榮子道号を榮子金を
其のまよして乾坤と度、母の也道号の中とて

新なるのまよとてかへぬく万一所よりありは隣り
の八日二日題と榮子時月一題の曲輪をわき
ちのこしと尋りてして道号なりとされしは
はして遠あをまよおいていさか佐五所は曲輪と
出でありんか 親子の榮子と是のよ六親の作と
各別也也 仰を榮子の今也二つ今も
るをすをよとてと有り親切しぬしぬと日月
のまよ水晶とて親とらす時天火天火と傳ふは
なるせんともいふありと有り興う寸日月と傳

この下しき事いふ事おとすからたをいふ
その下にふ日いふことたふひのふたれに事お
くしるは是れおて事いふ色世々の人も日月
のくかきふふふいし物いふことか流りす
たの事いふこといふた色いふ事いふこと
事いふこといふこと流りしと物いふこと
物守故に二十世いふこといふこと

又云ふのは、おの道多にあり、所よ、守事いふ
事いふこと守事いふこと守事いふこと守事いふこと
の物いふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこと

五月の毎こといふ事いふこといふこと
五月の毎こといふ事いふこといふこと
五月の毎こといふ事いふこといふこと
五月の毎こといふ事いふこといふこと

いよ—さき業と御傍とていふるなきは徳也の文字
一字入てきずよぬると三本 御傍ハ自由神也
貴術家政記部を因らるるとて好まぬやういふ
云々の事

屏凡 抄後 凡帳をきず用ひ事也 御傍
よりよ所は 御色子細事きく

御傍ハ信後多活とのゆれ 治也よりのゆれ
る子御色花々人の年よらし 御色さるもの後
述てかこの事とらるるが一句の事も御のちあ句

のも也とれてよとてい 五方のゆきまのゆきも鬼と
あしめよのゆきとつるもゆらへてある也 唐土也
人の代の樂よりの邊字もとゆきの才也 樂ハ

五方み縁が 御色とて けあし 御唱弁ハ 詩也 詩
ハ凡物也まらしくと 流の事 音の物を傳しあは
る物もあはれゆいと 送るものをのて 申の事とて

御新朝を樂とて 又ハ 唱弁ハ 御也 中とて 弁を
てあてえ也てぬき 事多のゆき也 在也とて 御と 訓記
しるハ 外ヲト通す ちき也てあとのよき句ハ ちのつる

五方の潮よりくちまきあきハ潮よりこのひゆぬ也小民
 の感應するらむしんん、縁竹若然の吹散らむむ
 てまんのやちんさちばゆゆおよのさかぬ神鬼を
 しとあまのゆるやうしをゆるらむしにゆふらよのてま
 とあやふとまらぬ、また後のむゆしてまんを打あるま
 つきとておしん、しんせよかんてらる箱ひらけし

つまらかんてらるあてはるさてう人の心のわりぬら
 めむ、これ常らぬ也、あはれせむしてまんを打あは
 りるのひやちんさちばゆゆおよのさかぬ神鬼を
 吹散らむむしんん、縁竹若然の吹散らむむ、
 今めしん、ゆるれた方利ハ建立の固るれ、風を休
 一昼夜の呼吸の数を尋ねて、すてり、れ、おのろ、か、あ、ら、
 物の上、訓、おのて、あ、お、の、ら、む、し、ん、ん、
 イウエツのガウのらむ、さ、ま、ら、む、し、ん、ん、
 おゆ、お、の、て、あ、お、の、ら、む、し、ん、ん、
 と、あ、ま、の、ゆる、や、う、し、を、ゆる、ら、む、し、に、ゆ、ふ、ら、よ、の、て、ま

ま、ら、む、し、ん、ん、
 ときれす、に、あ、ま、の、ゆる、や、う、し、を、ゆる、ら、む、し、に、ゆ、ふ、ら、よ、の、て、ま、ら、む、し、ん、ん、
 と、あ、ま、の、ゆる、や、う、し、を、ゆる、ら、む、し、に、ゆ、ふ、ら、よ、の、て、ま、ら、む、し、ん、ん、

しきとてふれはけれのわいんくわくわくふてよと
吾黨に説いてんを云ふ下万代のきてめん
の社ありきれいんくわくわくわくわく

徳は不易流りてくるありけし三身の本は是の
不易流りて自縛して真の徳は血脈の如くは
くは不易流りてくるありけし三身の本は是の
甲は血脈の如くは不易流りてくるありけし
徳は不易流りてくるありけし三身の本は是の

百代流りてくるありけし三身の本は是の
徳は血脈の如くは不易流りてくるありけし
百代流りてくるありけし三身の本は是の
ありて世の門人とてやむすかれ徳は血脈の
多し徳は血脈の如くは不易流りてくるありけし
宗敬は是徳は血脈の如くは不易流りてくるありけし
のふれはけれのわいんくわくわくわくわく
ふれはけれのわいんくわくわくわくわく

ありた自己の眼明かき人てん人とり人愈忽
のありて師とす余も色風物こは身よりと
くしくあはれまてん人とかくあはれまてん
うはれまてん師とす余も色風物こは身よりと
うはれまてん師とす余も色風物こは身よりと
うはれまてん師とす余も色風物こは身よりと
うの罪未承記の中の一言いんか

余具 題とす 四書有

茶研ていこく一むりすん 存の月 正節

筆手せりりえや月如の影も 秀

五光并 題揮月窓

芋と香の端の中を月も 許

神の身そよふてさる能のう 文料

介病も一人あのかる能 去来

病の起て 吾もやあす 浪化

隣 山家畧生

食ふ下り木の葉も通し奥の家

李由

まゝのまゝさうし 柳汁

本尊

みゆきや 糸血の柳うれ

許六

秋のや せむし又人の秋のえ

反村

輪蔵のやうさうろや秋のゆ

毛紙

あうらう 春盤や秋のたのしみ

一村

せうけいのおもいひと五月の

生袖

五月のや 旅せらふ人のち 野

陰實

五月のや せうしおとく 細の浪

温故

豆腐のやの 吉敷中もや 並河の

程巳

村のたれぬきり 乾つた地蔵

如元

張もく 傘はすまのくさ

存由

華子や 孫ららるる 家の子の家

柳布

新巻や 華子町の 茶の店

許六

やのしこのまや 格子の各款

文州

まがし せんへん 華子のまのま

許六

五名井の池内 小豆の御守有墨

御守の嵐も多し 小豆 紙

五名

吾仲

六月也 破子之河 且也

収村

流の京中 格文は書か 暮

吾仲

個城の 月夜子一 音の

住家奉納 二

談赤

青山吉と 程元の 摩り 鳥

李由

如 鶴川之 入之 墨子 袖

辨 十文

古 城の 行 家 朝之 如 花 亦

李 銅 扇

柳 花 亦 鶴 宮 撫之 北 之 屋

美魚

石 屋 子 経 文 城 之 也 亦

河 一 割 川 経 文 之 也 亦

光 統

石 竹 中 乃 子 一 並 子 小 傾 城

辨 北 丈

之 乃 子 一 吹 流 心 乃 乃 也

整

五 子 晴 之 氣 節 新 之 元

丈 辨

芽 竹 確 琴 之 音 子 之 九 傾 亦

宿 子 經 一 河 一 開 極 音 二
北 丈 金 中 亦

眞

苗 代 の 子 亦 病 好 の 額 言

十 丈

乃 一 之 の 睡 と 中 之 若 回 螺 亦

吾 仲

乞 食 の 経 師 一 言 十 夜 取

行程序し細涼 文を畧ス

子ら子孫る 涼や 州の中

文州

歌一 九

所一のこころや 苦なる野の秋

文房

文房よりせきりし師と送るこゝろ

身くも精との 反よ海松海を

許六

弁復まゑらる 田植の昔多事

文村

ふたつ 肺の比喩 文通

雲のしらけ さらさら 新茶

文房

山草も 前へてくじ 宇治の山

許六

心かり 疵瘡 くれくれ あれ

李由

風の 疾風 子寒し 釣子菜

結正

底物 前を復の 是れ

如舟

瘦子 ぬり 蚊をら 昔 少村

果を元

移来 昔のねひや 昔の中

果 逸友

昔の中 浪花 昔のきり

果 未深

抛打 昔の 浪や 物近

許六

六才女 相撲合

多と愛きほひよあつすまひ
下孫一息をけりる石地死
許六

二

下帯ハ見りる花 東あ撲
ハ騰ハコとぬきとぬれあ撲
本守

貳

月代よいまきり 草あ撲
見ぬの鼻血あつやばあ撲
許六

卅

あの人あつとあ撲、親あつ
あつこのあ腹つるすあ
本守

五

細金馬やあああ撲
あああああああ撲
許六

六

あああああああ撲
稲妻の相あはあああ
本守

追加

甲採 序賦

恙也此きてりり町空富は住居し氷の雨の用心とん岩
 窟のふくぬあつくる世とあつた麻ハシ瘧ハシひやがう
ケカ下輪はさあつて即の電のまきうら。社めくたれ
 早田の海客の舟は年と重ひん念兵衛のりまをたす
 そくくさののさめやう九鳥の葉のふくあつたさう
 生得くといの秋平うらの葉といはさし葉の上とえん
 坂の塔とてて千根の極とあう類白の雲とか
 ゆうたよあつて病室う城まじむに凡の威と
 旅もように凡身の物にならんやうにふ山橋
 是あのをちとやとらして心々九只一日の回廊と
 さくで賤う堀半井谷寺宿んとせまはるは又おき
 くらした部とのうらありひの見れは送死学螺のさ
 の居つる宿あを凡社の成人社を宿主奇カウ+壘
 あとすれて例の夜宮はあ合ふととらふて二本のこ

丁巳秋七月

主人李貴章述 写

Handwritten text at the top of the page, possibly a date or header.

Main body of handwritten text in a cursive script, covering most of the page.



